

## 第4回 藤沢周平原作作品

近年、映画・テレビの双方で藤沢周平の時代小説が映像化されることが多くなった。

こうしたブームの先鞭をつけたのが2002年の『たそがれ清兵衛』だろう。藤沢原作で実は初の映画作品となる本作を監督した山田洋次は、その大ヒットを受けて『隠し剣 鬼の爪』『武士の一分』を続けて発表。そして、山田作品のヒット以降、彼の描いてきた世界というのが藤沢ワールドの原風景であるような認識が広がり、近年公開されている映画も、ほとんどがその影響下にある。

が、筆者にはどうしても違和感がある。一連の時代劇は、『男はつらいよ』『学校』から連なる山田洋次の《清貧》的な美学の世界であって、藤沢ワールドの魅力は実は他にあるように思えてならなかったからだ。山田時代劇は作品としてのクオリティの高さは確かなのだが、藤沢周平の世界とは何かが違う。

そこで今回は、山田洋次監督作以外での藤沢原作の名作時代劇を紹介していきたい。

### ■『闇の歯車』（1984年／映像京都＝フジテレビ、テレビ長編／監督：井上昭、脚本：隆巴／出演：仲代達矢、役所広司、益岡徹、東野英治郎ほか）

1980年代初頭、フジテレビには「時代劇スペシャル」という、毎週2時間の新作スペシャル時代劇が放送される贅沢な枠があった。この枠では、統括するフジテレビの岡田太郎プロデューサーがアクション性や娯楽性よりも、人間ドラマとしての時代劇を重視してラインナップが組まれることになる。その結果、藤沢原作も数多く採用された。

84年の『闇の歯車』もまた、その一本。

川端のうらぶれた居酒屋の常連である4人の客が1人の盗賊から仲間に誘われ、それぞれが人生の歯車を狂わせていくという基本的な設定、展開は原作と変わらない。見事なのは、数々の名作時代劇を生み出してきた旧・大映京都スタッフによる、居酒屋を中心としたハードボイルドな空間作りだ。

音楽に並々ならぬこだわりをもつ井上昭監督は、バイオリンの哀切なメロディをBGMの核に据え、それと叩きつける雨音やひぐらしの鳴き声を合わせることで、アウトローたち集う空間をほろ苦く彩っていく。江戸の闇にポッと灯る赤提灯。その明かりを求めて集う寂しい男たち。安酒を飲みながら黙って過ぎていく、静かな大人の時間がそこには漂う。

そして、『たそがれ清兵衛』『隠し剣鬼の爪』といった山田洋次では、どこまでも厳しい海坂の雄大な自然を照らし出した照明技師・中岡源権が、ここでは江戸の漆黒の闇を創り出している。中岡が照らすのは、状況によって全く異なる闇だ。どこまでも暗い江戸の裏社会の絶望的な黒、居酒屋の灯りとのコントラストで浮かび上がる優しく淡い黒、盗みの

シーンのスタイリッシュな黒、そして滅び行くものたちを包み込んでいく突き刺さるような黒……中岡はさまざまな「黒」を創出することで、物語に流れる感情をより深く伝えている。まるでジャン・ギャバンの時代の〈古き良き〉フランス映画のような、うら寂しい、それでいて優しい情感がそこにある。

■『彫師伊之助 消えた女』（1982年／フジテレビ＝国際放映、テレビ長編／監督：小野田嘉幹、脚本：保利吉紀／出演：中村梅之助、野川由美子、殿山泰司ほか）

「時代劇スペシャル」枠でいえば、82年の『彫師伊之助 消えた女』も忘れ難い一本だ。

元・岡っ引きの伊之助（中村梅之助）は今は彫師として版画を彫っている。そんな彼の許に、かつての仲間（殿山泰司）がやってくる。何者かに連れ去られた娘・おようを探し出してほしい、と。それを受けて伊之助は仕事の合間を縫いながら、探索を開始する。

原作では、おようと伊之助の間に少しの面識しかないことになっていたが、ここでは、おようは伊之助の「逃げた女房」という設定になっている。そのため、その行方を捜す伊之助の想いは一層強いものになった。

この脚色がラストで利いてくる。伊之助は黒幕の一団と乱闘になる。どしゃ降りの雨に打たれながら全身を斬られ、それでも必死に戦う伊之助。そして、おようの居所が分かると傷ついた体を必死に走らせながら、おようの許へ向かう。おようは岡場所にいた。病に冒され、やつれ果てたおようを伊之助は「うちに帰ろうな……」と抱きしめる。ボロボロの体をよたつかせながら、おようを背負って一人で江戸の街中に行く伊之助の姿には胸を締め付けられるものがある。家に帰ると、おようは静かに息を引き取る。伊之助はそんなおようの唇に、そっと紅を塗る。

命を賭けた闘争を経ることで、初めて男と女にも真の絆が生まれる。そこには言葉すら介在する余地はない。藤沢ワールドに通底する、そんな想いの伝わってくる作品だ。

■『神谷玄次郎捕物控』第十話「闇の穴」（1990年／フジテレビ＝松竹、テレビシリーズ／監督：井上昭、脚本：古田求／出演：古谷一行、藤真利子、唐沢寿明、高橋長英ほか）

89年にスタートして大ヒットした『鬼平犯科帳』の後を受けて、同じ座組で製作されたのがこの『神谷玄次郎捕物控』だ。が、この原作はよくある捕り物ミステリーとしての色合いがあまりに強かったため、『鬼平』同様の濃厚な人間ドラマを目指した製作陣には不満の残るものだった。松竹のプロデューサー・佐生哲雄は、自分の好きな藤沢短編を「神谷～」の世界に盛り込むことで、製作者としての欲求を満たそうとする。それが第十話「闇の穴」だ。

原作の短編「闇の穴」は、裏店で夫や娘とつつましく暮らす女の許に、姿を消していたかつての夫が現れ、生活がかき乱されていくという話だ。このシンプルな短編に作り手の

想いが加わることで、傑作が生まれることになる。

同心・神谷（古谷一行）は、ロクに家にも帰らずに、夫に逃げられた子持ちの女・お津世（藤真利子）の経営する居酒屋の二階で寝泊りしている。二人は愛人関係にあって、まるで夫婦のように寄り添って暮らす。それがシリーズの基本設定だ。

そこへ、三年前に姿を消していた津世の亭主・峰吉（高橋長英）が帰ってくる。心を入れかえたという峰吉に、津世は過去の恋情をつのらせる。そのことを神谷に告白する津世。「未練がねえって言ったらウソになる。しかしオレは遊び人だ。遊び人には遊び人のケジメってやつがある。人の幸せブチ壊すマネはしねえよ」

神谷はこうして身を引く。幸せそうに暮らす親子三人。しかし、峰吉は実は盗賊の一味だった。夜のドブ川に神谷は峰吉を追い詰め、対峙する。開き直って神谷をあざ笑う峰吉。

「だがな……女の取り合いはオレの勝ちだ！」

峰吉を斬り捨てる神谷。

「オレは、お津世の亭主じゃねえ……オレはただ……ただの悪党を一人斬っただけだ……」

神谷は自分にそう言い聞かせるしかなかった。

雨が降りしきる路地裏、ズブ濡れになりながら呆然とたたずむ津世。そこに、神谷が峰吉の死を報せにやってくる。虚ろな視線を交わす、男と女。

「幸せになりそなたの女の見物に来たのかい」「峰吉は死んだ……みんな忘れろ」「死んだことは知ってるよ……三年前にね」

地面に這いつくばって泣く津世を。神谷が抱き起こす。

「峰吉なんて男は初めからいなかったのさ……」

そうつぶやく津世に何も言うことができず、神谷は抱きしめる。津世もそれに体を委ねる。泥まみれで抱き合う二人を、雨が打ちつけている。命がけの決闘を超えて、やるせない情念をぶつけ合うしかない男と女の結末がそこにあった。

■『清左衛門残日録』第一話「昏ルルニ未ダ遠シ」（1993年／NHK、テレビシリーズ／演出：村上佑二、脚本：竹山洋／出演：仲代達矢、財津一郎、南果歩、鈴木瑞穂ほか）

90年代の半ばからは、テレビでの藤沢原作はNHKがほぼ独占状態で映像化している。93年の『清左衛門残日録』もその中の一本だ。これは隠居した海坂藩重役・三屋清左衛門が藩の陰謀に巻き込まれていく話で、原作では老いや寂寥感と戦いながら毎日の送るのに対して、NHK版で仲代達矢が演じる清左衛門には、どこかまだ精悍さが残る。それは、老いをそのままに描くことに抵抗があり、「隠居といえども男でござる」といった逞しさを描こうという脚本家・竹山洋の狙いでもあった。それだけに、隠居してもなお、失われた青春時代を取り戻さんとする気概が清左衛門には満ちている。

第一話でそんな清左衛門の前に現れるのが、若き日の友・金井奥之助。二人は藩の派閥争いに巻き込まれ、道を分かってきた。そして、清左衛門の派が勝利し、金井の派は敗北

する。久々に再会したかつての友に、往時の面影はなく落ちぶれていた。蒼ざめた顔に卑屈な笑いを浮かべ、眼には生気がない。全身からコンプレックスに満ちたネガティブな気を放つ、老いさらばえた男の惨めさを、佐藤慶が完璧に演じきっている。

偶然の再会から金井は清左衛門の隠居部屋を訪れるようになり、昼間から呑んでくれて酔っ払う。そこに回想で青春の日々が挿入されるため、今の金井の姿が一層痛々しいものとして映る。「どうでもいいのだ。俺は死んだほうがいい。みんなが喜ぶ」と愚痴る金井を見ながら、一つ間違えば自分がそうになっていたかもしれないと思う清左衛門。彼は「金井と昔のように付き合いたい」と考え、磯釣りに誘う。

金井はそこで清左衛門を海へ突き落とそうとする。が、失敗して自らが海へ転落。清左衛門に助けられる。清左衛門は金井の行いを見なかったことにして介抱をする。

「貴公が憎かった……」と想いを吐露しようとする金井を清左衛門は止める。「何も言わなくてくれ。ワシは貴公と昔に戻ろうと……」だが、金井は続ける。「時は過ぎたのだ。ワシは一度も日の目を見なかった。落ちぶれたまま隠居するしかなかった」ただ聞くしかない清左衛門。そこに、原作にも書かれている決定的なセリフが重なってくる。「許してくれとは言わぬ。助けてもらった礼も言いたくない。それでも、昔の友人という気持が一片でも残っていたら、このままわしを見捨てて帰ってくれ」

まだ青春をやり直そうとする清左衛門と、諦めと嫉妬の中で人生を惨めに終わらそうとする金井。俳優座養成所同期で50年来の親友同士でもある仲代と佐藤による、その抜群の呼吸により生み出される芝居の緊張感により、過ぎ去った時間は絶対に取り戻されることはないという、清左衛門に突きつけられる残酷な現実が。生々しく迫ってくる。

## ■『蝉しぐれ』（2003年／NHK、テレビシリーズ／演出：佐藤幹夫、脚本：黒土三男／出演：内野聖陽、水野真紀、平幹二朗、柄本明ほか）

同じくNHKで製作された03年の『蝉しぐれ』は、山田洋次登場以前の藤沢周平原作の時代劇の集大成的ともいえる内容になっている。

本作が見事なのは、なんとといっても黒土三男による構成である。

これは、幼い頃から互いに好き合いながらも、次々と襲い来る運命にさいなまれ、結局は結ばれ得なかった男と女の20年に及ぶ物語である。原作では二人の過ごした年月は編年体で描かれている。対して黒土の脚本は、原作でエピローグとして配された「20年後の再会」のシーンを冒頭に配置させ、そこから二人の思い出話として回想させながら物語を展開させていく。

文四郎（内野聖陽）は自らの父を陥れ、家族をどん底に落としこんだ家老（平幹二朗）が、今度は藩主の子供を産んだ想い人・お福（水野真紀）を殺めようとしていると知り、命を賭けてこれを守る。それから20年、文四郎は家族を持ち、それなりの役職に出世。女・お福は藩主の側室となり、そして藩主の死去にともない尼寺に入るようになっていた。

福が尼寺へ発つその日、二人は再会する。つまりこれは、二人の俗世での最後の邂逅なのである。

「文四郎さん……今日はそう呼ばせてください」「お福さま……」「福です。今日の私は福です。そう呼んでください。遠いあの日のように、せめて今日だけは」が、文四郎は「ふく」と呼ぶことが出来ない。黙り込む二人の間に蝉しぐれが聞こえてくる。そして、回想へと入っていく。まばゆいものを見るような目で過去を思い出し、語り合う二人。この視点が挟まれることで、回想を通して展開される過去の物語が、もう取り戻すことの出来ない輝かしい青春の追憶として、ほろ苦く匂い立ってくる。

この空間にはこの二人しかいない。それでも二人は互いを律して、互いの身分のままの距離を保とうとする。そして、溢れんばかりの感情を押し殺しながら、ポツリポツリと語り合う。「子を失った時、いっそ死んでしまいたいと思いました。それを押しとどめてくれたのは文四郎さん、あなたでした。生きてさえいれば、またいつかお会いする日が来るかもしれぬ、と。それだけを頼りに……」と、徐々に心の底を吐露するようになるお福だが、文四郎はひたすらに押し黙っている。二人の悔恨が深く静かに染み渡ってくる演出だ。

だからこそ、最終回の最後になって二人が互いの感情を解き放ち、初めて結ばれたとき、「ふく……！」と短くその名前を呼ぶだけの文四郎のセリフが重く響いてくる。それは、ノスタルジーの哀惜とともに、青春の残滓がようやく昇華された瞬間を意味するものだからだ。

藤沢周平原作の時代劇にはいつも、理不尽な状況に追い込まれながらも必死に立ち向かう人々への優しい眼差しがある。そうして描かれる、人間たちの哀しくも瑞々しい感情。それこそが魅力の根幹だといえるだろう。

#### 【DVD 情報】

『清左衛門残日録 1集 昏ルルニ未ダ遠シ／白い顔』（NHK エンタープライズ）

『蝉しぐれ』（NHK エンタープライズ）